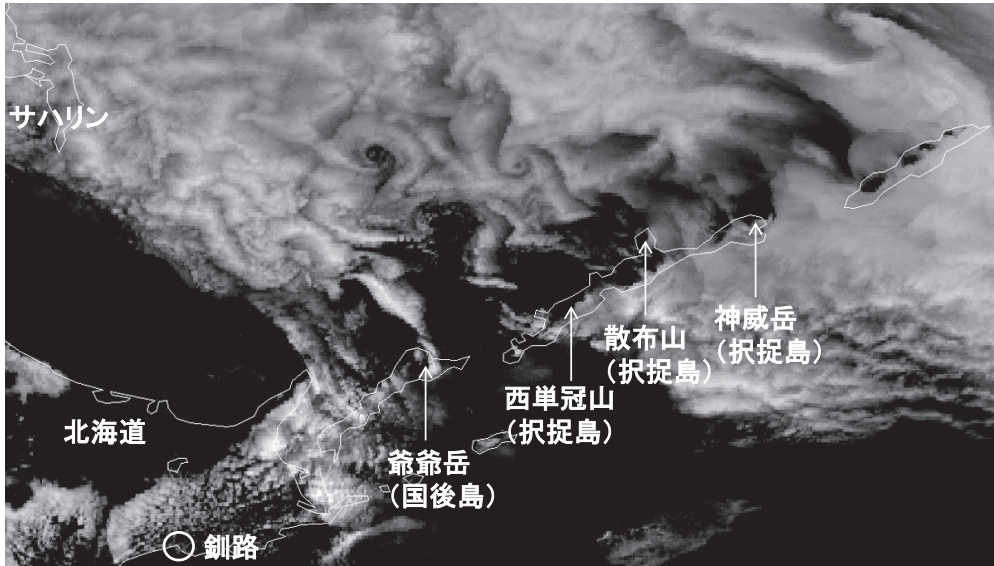




今月のひまわり画像—2021年8月

オホーツク海南部に拡がるカルマン渦



第1図 2021年8月15日09時（日本時間）のオホーツク海南部付近の可視画像。

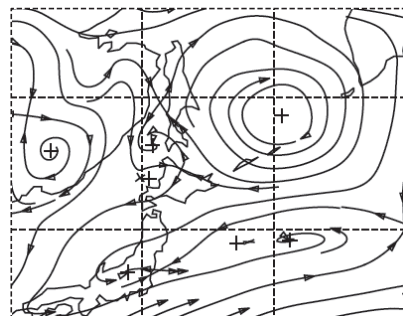
2021年8月中旬、西日本～東日本の広い範囲で記録的な大雨となり、特に13～15日、各地で大雨特別警報が発表され、甚大な災害が発生した。この大雨をもたらした要因の一つとして、冷涼湿潤なオホーツク海高気圧の存在が挙げられる。北日本では目立った災害は発生していないが、12～15日は記録的な低温となっていたことを見逃してはならない。ここでは、今回の大雨期間中、衛星画像で見られたオホーツク海高気圧の中心付近の状況を紹介する。

第1図は8月15日09時（日本時間）のオホーツク海南部付近の可視画像である。この日、オホーツク海高気圧は同海域南部にほとんど停滞し、勢力をやや強めていた。同図では国後島の爺爺岳、択捉島の西単冠山、散布山、神威岳の標高約1,200～1,800mの孤立峰に近い山岳付近の風下に並ぶ複数列のカルマン渦を確認できる。これらのカルマン渦の存在域はオホーツク海高気圧の中心から南西側にやや離れた下層の南東風が比較的強い場に位置し（第2図）、850hPa面の風速10kt（ $1\text{kt} \approx 0.51\text{m/s}$ ）以上の領域に概ね対応していた。そして、いくつかの渦は16日にかけて高気圧の周辺を時計回りに半周以上しながらカムチャツカ半島方面に流

されており、驚かされる。

国後島、択捉島に高層気象観測所はないが、北海道の釧路における高層観測データによると、11日から沈降性逆転層が形成され、次第に高度が低下していた。15日09時は国後島、択捉島の各山岳の頂上よりやや低い高度にあたる1,030～1,120m（900～890hPa）付近に明瞭な沈降性逆転層が顕在化し、カルマン渦の発生に好都合な成層状態となっていたと推察される。

（気象庁大気海洋部予報課 木下 仁）



第2図 気象庁全球モデルによる15日09時のオホーツク海付近の850hPa 流線解析図。